2020年6月5日

新島先生の人生のターニングポイント―――ヨハネ３：１６を心にとめて

―――「隣人愛」を考える（６）：新島先生の受けた隣人愛（３）

副校長　竹山　幸男

6月が始まりました。先週から今週にかけても、京都ではやわらかな雨が降る日もあり、間もなく梅雨入りという季節に入りました。晴れた日の夜空は、月が明るく輝いていて、ちょうど三日月から満月に向けて毎日少しずつかたちを変えて大きくなりながら、京都の街並みを照らしてくれています。緊急事態宣言が解除されたとはいえ、京都の街中は外国人の観光客がおられないので、いつものような賑やかさはない状況です。感染症の状況が終息に向かって、一日も早く京都に、国内、そして、海外からの皆さんが訪れていただける日が来ることをお祈りしているところです。6月はじめの皆さんのお住まいの地域で見られる夜空の風景や街並みの様子はいかがでしょうか。

今週（6月第1週）は、学年をグループに分けて分散させたかたちでの登校日の設定をいたしました。久しぶりにお会いできた生徒の皆さんも多くおられ、4月の半ばから約1か月半おこなってきた、オンライン学習を通じての皆さんのつながりをふまえながら、登校日では、各教科の「学習のポータルサイト」での学びについて、サポートをする機会を持つことができました。体調面、その他さまざまな事情で登校することができなかった生徒の皆さんに対しても、「学習ポータルサイト」を用いた学びを基本に据えて、各教科の学びの内容、生徒の皆さんとのやり取りを継続させていただきますので、これまでに引き続き、しっかりと取り組んでいただきますようお願いいたします。特に、1年生については、入学して学校に登校していただいた日も数日しかありませんので、まだまだいろいろと学校の様子がわからないことも多いかと思います。生徒の皆さんからの質問、相談については、教科の内容であれば教科の先生へ、学校についての相談であれば担任の先生へ、ご遠慮なくご連絡ください。

これまでの3か月間と直近1週間の、日本の状況と対応、海外の状況と対応、そして、医療関係の専門家の方々の提言など、さまざまな状況を総合的に考慮すると、感染症の今後の状況については、まだまだ予測が難しい状況が続くと思われます。同志社中学校では、中学生という発達段階での健康面への配慮や、京阪神はじめ近畿圏、ならびに愛知、岐阜などからも新幹線通学で通っておられる生徒の皆さんも多くおられることも考慮しつつ、生徒のいのちと健康を守ることを最優先にしながら、学校としての対応を慎重に検討しております。感染状況の推移（緊急事態宣言解除による緩み、第2波への警戒など）にもよりますが、6月の第3週目あたりまでは、学年を分散させた登校日を継続していくことを考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第９週目（６月８日～）は、これまでの取り組みに引き続き、動画を用いた課題の提示、提出、メールでの質問、教科によってはzoomで皆さんからの質問を受け付ける時間を設けますので、生徒の皆さんも参加してみてください。今週は、先週に引き続き学年を２つのグループに分けて、学年を分散した登校日を設定しますので、別途学校からの連絡を見ていただきますようよろしくお願いいたします。今週火曜日（6月9日）から6月下旬にかけては、各学年の聖書、保健体育、音楽、技術家庭、美術の先生方と生徒の皆さんとのzoomを用いての学び面談（クラスまたはグループなどで）が始まります。今週から来週にかけての各学年・クラスの学び面談の予定については、本日ご案内の面談予定表でご確認ください。

生徒の皆さんに夏休みに取り組んでいただく「自由研究」に向けたオリエンテーション、準備も少しずつ進められています。1年生の皆さんは、先週、自由研究に向けてのグループ面談を実施いたしました。テーマについて参考になりそうな本について、「図書館の先生と相談して探してみたい」を選んだ生徒の皆さんには、図書館の先生から皆さんに連絡がありますのでご確認ください。1年生は今週から来週月曜日にかけて、皆さんが取り組もうと考えているテーマについての登録期間となっています。学習ポータルサイトの1年生の自由研究のコーナーから、各自登録をお願いいたします。あわせて、2回目の自由研究の面談を来週半ばからその翌週にかけて実施する予定です。皆さんのロイロノートにお送りしている「自由研究2回目の面談に向けてーテーマを深めてみよう」について、動画を見ながら取り組んでいただきますようお願いいたします。（面談日程については、来週火曜日（9日）に連絡予定です。）2・3年生の皆さんは、5月末までが自由研究の登録期間でした。まだ、登録ができていない生徒の皆さんは、今週末までに登録をすませてくださいますようお願いいたします。2・3年生に皆さんに対しての登録方法、その他のオリエンテーションについては、教務部の自由研究担当の先生から動画にてすでに皆さんに案内しておりますのでご確認ください。

日ごろの担任の先生からの連絡、面談については、その都度レスポンス（応答）していただき、皆さんの日頃の様子などを知らせてください。健康観察については、引き続き保健室の先生あてご提出ください。特に、来週も登校日が継続しますので、健康観察をしっかりとしていただき連絡をよろしくお願いいたします。第９週目の詳細については、別途ホームページ上の教務部より「第９週目のお知らせ」または学習ポータルサイト上の生徒ページ・生徒伝達に「第９週目のお知らせ」をご覧ください。機器（iPad）やアプリの使い方で不明な点があれば、「学習ポータルサイト」（→［生徒ページ］→［在宅学習サポート］）にアドバイスや解決方法を掲載しています。また、「2020年度版ICT活用・情報倫理ハンドブック」（同志社中学校）の1～28ページに、課題提出で用いているロイロノート、zoomの利用方法を含め、iPadでの学習に際してのさまざまな活用ガイドが掲載されていますので、取り組みの際には、引き続き参照するようにしてください。

さて、先週の日曜日（5月31日）は、キリスト教会の暦では「ペンテコステ」（聖霊降臨節）でした。思い起こせば、関西圏にも緊急事態宣言が出され、学校が休校になった時期がちょうど「イースター」（復活節）の時期でした。イエス・キリストの十字架と復活の出来事があってから、40日間弟子たちに現われ、主イエスが天にあげられた後に助け主としての聖霊を送る約束をしていました。（ヨハネによる福音書7章37-39節、14-16章など）その約束が「ペンテコステ」の出来事で、新約聖書の使徒の働きの1章から2章にかけて記されています。「クリスマス」「イースター」ほど一般には知られてはいませんが、キリスト教会では現在まで続く「キリスト教会の始まり」として毎年記念されているものです。

海外のペンテコステの集会には、多くの人が集う（写真は 2019 年のロンドン）

「**助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こしてくださいます。**」（ヨハネによる福音書14章26節）

それでは、主イエスが語っている助け主、聖霊がわたしたちとともにおられるときに、私たちにどのようなことを教え、導かれるのでしょうか。１つは、神様の前で私たちが罪を持っていることに気づかされ、主イエスを救い主として告白できるように導かれていること、もう１つは、わたしたちが神様の愛に気づかされ、その愛に生かされて隣人を互いに愛することができるように導かれていること、であると聖書には書かれています。

日本語の「愛」という漢字が、「心を受ける」という組み合わせで構成されていることを考えると、愛は、まず心で受けるところから始まるものと考えることもできます。何をまず心で受けるのかと言えば、神様の愛を心で受けるところから始まる、と言えるのかもしれません。

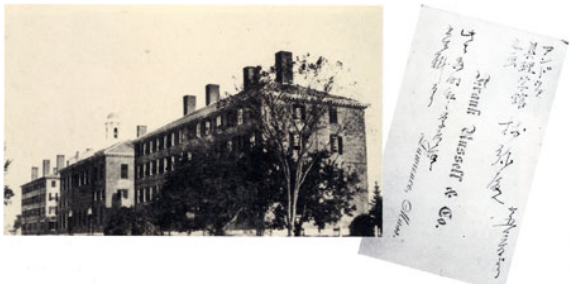
先日来2週間にわたって、新島先生の受けた隣人愛について、敬虔なクリスチャンであったハーディー夫妻、ヒドゥンさん、フリント夫妻との出会いの中で実体験を通じて受けたものであったことを学ばせていただいたところです。そして、新島先生にとって、生涯にわたっての愛唱聖句となったのが、ヨハネによる福音書3章16節であったこともお伝えしたところです。新島先生は、当時のアメリカでこの聖句によってクリスチャンになった方が多くあったこと、聖書の御言葉の中でも「神の聖なる言葉のページの上に輝くすべての星々の中の太陽」と呼んだくらい大切にされた聖句であったようです。新島先生が、アーモスト大学を卒業後、アンドーバー神学校で学び初めての公開説教をするにあたり選んだ聖句も、ヨハネによる福音書3章16節でした。（1874年5月10日レキシントンのハンコック教会にて）この英文説教は、完全原稿に近いかたちで残されて

いる貴重なもので、編集者（北垣先生）によって「神の愛」とタイトルがつけられて日本語でも読むことができます。この説教の最初の部分を見てみましょう。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを得るためである。」（ヨハネによる福音書3章16節）

『私が選びましたこの聖句は、新約聖書の中でも大層目立つ、特異なものでありまして、数多くの聖書の読者がこれに惹きつけられてきたように思います。この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすものでありまして、なぜ神が愛する御子をさえ惜しまずにこの世にお与えになったのか、またいかなる条件の下でなら、この罪深い人類は永年のいのちを得ることができるのかという問題を、はっきりと説明するのであります。まことにこれこそは福音物語の神髄であり、地上で私たちの救い主が果たされた役割の意味を解くことがカギであります。まず最初に、この世に対する神の愛の強烈さについて調べてみることにいたしましょう。この聖句の最初のところは「お与えになったほどに」となっていますが、これはこの世に対する神の愛の強烈さの度合いを正しく表現し、規定するものです。神の愛は狭い範囲に限定されるものではく、あたかもそれは無限であるかのように示されています。なぜなら神は無限なのであり、神こそは愛であるからです。』（同志社編「新島襄教育宗教論集（岩波文庫）」142～156ページ）

この聖句はフリント先生が最初に新島先生に教え、この聖句がクリスチャンになるきっかけになったと言われています。（フリント先生は、聖書、祈り、安息日、与えること、節制を大切にして信仰生活を歩んでいた、と言われています。）『この聖句が彼の回心を呼び起こし、・・この説教は彼の福音信仰を証しするものであり、彼の受けた神学教育の総決算とみなしうる。』とも指摘されています。（同上142ページ）



新島先生が通ったフィリップス・アカデミーの校舎（元アンドーヴァー神学校校舎）

この聖句の前の部分、ヨハネによる福音書の3章では、パリサイ人でありユダヤ人の指導者であったニコデモが、「神の国に入るにはどうしたらよいか」と尋ねる箇所から始まり、イエス様は、そのためには「新しく生まれる」ことが必要であることを語っています。ちょうど、善きサマリア人のたとえ話が「永遠のいのちを持つためには何をしたらいいのでしょうか」と尋ねた律法の専門家への返答であったことと重なるものがあるように思います。ちょうど、新島先生もまた、アメリカでの生活が始まり、下宿先で、教会で、学校で、聖書の学びを本格的に学ぶにつれて、同じような問いに直面したのではないかと思います。

それでは、新島先生はこれらの問いをどのように受け止めてクリスチャンになっていったのでしょうか。

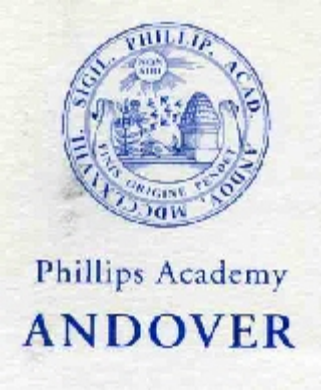
新島先生もまた、アメリカでの生活が始まり、キリスト教にふれるにつれて、良心が研ぎ澄まされ、自分のこれまでの罪に気づかされていきます。例えば、「傲慢、偽善、嫉妬、憎悪、放蕩、淫乱」などさまざまな思い、経験があったことを告白しています。それらを神様の前に素直に認め、「私の罪を洗い流し、私の邪悪な心を取り去ってください。」とお祈りされています。「神様の世を愛することの深さは、人間の情けない有り様を十分に知らなければ到底わからない」ということも語られています。つまり、聖なる神様の前に罪深い自分に気づかされたときに、神様から一番大切な独り子であるイエス・キリストを与えていただく資格は自分にはないことに気づきます。そして、そのような自分に対して、神様の愛によって、無条件で、無償でイエス・キリストの十字架による救いが与えられるという大いなる恵みが与えられていることにも気づくことができたようです。そして、その救いを心から喜んで受け入れて、クリスチャンとなる決心をしたと言われています。

このことは、今も昔もなかなか頭の中だけで理解できるものではありません。神様の前に罪深い人間を救うために、神様が愛する独り子を与えられたということは、信仰によってはじめて、本当の意味で理解できるものだと言われています。その意味では、150年前のアメリカで生活していた新島先生にも、聖書に約束されている助け主なる聖霊が働いたからこそ、クリスチャンとして新しい生き方、人生を始める経験（回心）、つまり、人生の転換点、ターニングポイントを経験できたのだと言えるでしょう。新島先生は、『私も昔の七五三太（しめた）のときとは大きく違って、この聖人の道で心が深く満ち、また、日夜、聖書を読んで、善を行い、いろいろなことを神様にお祈りをしている。』と日本の実家、父・民治宛に手紙を書いています。（「現代語で読む新島襄（丸善出版）」70～78ページで全文を読むことができます。）また、脱国を助けた福士さんにも、『キリストこそは暗黒に照らされた邪悪な世界を照らし、救いの道へとぼくらを導く光であります。ローソクの火は消えることはありますが、これは永遠のいのちをあらわす真の光であって、どのようにしてもそれを消すことはできません。そしてこの生命はイエス・キリストを通していただくことができるのです。』と記し、その直後にヨハネ3章16-17節を引用しています。（J.D.デイヴィス著 北垣宗治訳「新島襄の生涯(同志社大学出版部)」38～40ページ参照）このように、アメリカでハーディー夫妻に引き取られJoseph（ヨセフ）と名付けられた新島先生はクリスチャンとなられ、その人格形成という点においても、名実ともに新しい人生を歩み始められたのでした。そして、この「信仰」があったからこそ、新島先生が日本に戻って教会と教育の両面で、日本におけるキリスト教宣教を進めていくにあたり、「取る教育」ではなく「与える教育」を重視することにつながったのではないか、と指摘されています。（本井康博先生「元祖リベラリスト―新島襄を語る（五）（思文閣出版）」190～202ページ：「新島襄の信仰事始め」参照）

簡単に言えば、新島先生の生き方、スピリットに見られるように、神様の愛に基づくクリスチャンの生き方は、自分に向かっていく愛ではなく、他者に向かう愛、与える愛の実践であることともつながっているように思います。

『利己的な「取る教育」をしりぞけ、逆に他者に目を向け、隣人に「与える教育」を重視します。日本では、前者を実践する学校は山ほどある。それに対して後者は実に少ない、という認識があったからです。ここから、新島は、アメリカの母校（フィリップスアカデミー）の校訓（『Non Sibi　(Not for self)』）にあるように、自己犠牲と奉仕とを教育目標に掲げます。受けたもの、与えたられたものを社会や隣人に還元する、と言い換えることができます。それを推し進めるためには、やはり信仰やキリスト教の力を借りる必要がある、と新島は考えていました。』（前掲書199ページより）

フィリップス・アカデミーの校章にも、スクール・モットーである『Non Sibi』が太陽のように掲げてある



「**愛は寛容であり、親切です。また、人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてを我慢し、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して耐えることがありません。**」（コリント人への手紙1　13章4-8節）

コロナ感染症による現在の世界と日本の状況の中では、今まで経験したことのないようなさまざまなできごとが日々続いています。いのちや健康に関するリスク、行動自粛要請による経済的なリスクなど、さまざまなできごとが目の前に起こるごとに、私たちの心も、考え方も、そして、具体的な行動も日々問われているように思います。2020年のペンテコステを迎えた私たち一人ひとりにも、同志社の創立者・新島先生にも働かれた助け主なる聖霊がわたしたちとともに今も生きて働いてくださり、見守りと導きを与えてくださいますように。私たち一人ひとりが神様の愛に気づかされ、その愛に生かされて隣人を互いに愛することができるように導かれる1週間であるように心よりお祈りしております。

「**神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるように　なるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。**」（ヨハネの手紙1　4章　9-13節）

5 To FUKUSHI Unokichi [JD, L&L][1] Andover
February 23, 1866

Mr. Munokite,

Dear Sir:

I am very well through God's mercy. Since I commenced my hazardous adventure I have spent many valuable days in hard work; oh! sometimes I had very miserable work: but this work I did not do for money, but for true knowledge. When I called on Him who made heaven and earth and sea, and all that in them is, my sorrow turned into joy, and my misery to success. Oh, I may surely say it is very wonderful and marvelous that such success has fallen on me! I passed through many thousand miles of water very safely without hurricane, tempest, or any trouble. When I came to Boston, the ship's owner, Mr. Alpheus Hardy, and the ship's captain, Horace S. Taylor, relieved me from my miserable condition, and gave me all things which I needed, and sent me to the academy at Andover, Mass., to get an education, paying my board and expenses.

I came to the house of Mr. Hidden—he don't keep any boarder but me only—and he and his sister care for me as much as for one of their own family, and I am very much enjoyed to stay here. Also I find a kind and religious man in Mr. Flint, a neighbor who was a teacher of some higher school for thirteen years. Every evening he hears me recite in arithmetic, that is named Eaton's Higher School Arithmetic, and his wife explains to me the most holy and valuable book in the world, entitled the New Testament, and tells about our Saviour, Jesus Chirist, who was sent down from his Father to enlighten the darkness and save sinners. In the academy I am studying reading, spelling, grammar, and the same arithmetic; also I have a Bible-lesson every Sabbath. All the teachers and scholars, and many who know about me, are interested in me and love me, and some give me things to please me. But these things they don't do for my sake, but for the Lord Jesus Christ.

Oh, dear friend, think you well who is Christ. The same is the Light in darkness. It is not the light that comes out from the sun, moon, stars, and candles; but this the true light that shines on the benighted and wicked world and guides us unto the way of salvation. The light of candle is blown away, but this is the true light of eternal life, and we can by no wise blow it out, and we may take this life through Jesus Christ. "For God so loved the world, that he gave his only begotten Son, that whosoever believeth on him should not perish, but have everlasting life. For God sent not his Son into the world to condemn the world, but that the world through him might believe." See John, 3d chapt. 16–17 verses, New Testament.

Oh, dear friend, I have nothing to repay your kindness, but will send only, study the Bible, and my photograph. Please care for your health, and study the book I have mentioned above. Oh, alas! it is not the country's law to study the Bible and worship our tender and merciful Father who made us, loved us, and gave his only begotten Son, through whom we may be saved. But the law ought to be broken, because it is made by the devil, the king of the world. The world was not made by the devil, but by our true Father, who gave unto us his true law. O friend, whether then is right in the sight of God[1] to hearken unto the devil more than unto God, please judge you.

If the fierce devil persecute you for righteousness' sake, don't trouble yourself; I am sure God will protect you from all evil, and though your body should be killed, your soul would be received unto him, and you would dwell in the brightest[2] place with eternal life. I would like, indeed, to go there with you.

Your truly friend,

Nee Sima Simata[3]

1. Both Davis (JD) and Hardy (L&L) render this early letter which each has edited in his own light; Davis is the fuller but in two places Hardy is followed. Davis carries the salutation "Mr. Munokite" which was Neesima's original mistaken rendering of Unokichi; in later years he went by the name of FUKUSHI Naritoyo.

新島先生が書いた
英文手紙に
チャレンジしよう！

新島先生の函館脱国の恩人、
福士さん宛の手紙です。
アメリカ上陸後、
半年もたたない時の
英文の手紙なので、
生徒の皆さんも
読んでみましょう！

＊ 宛先の Munokite は、
Unokichi のことで、
新島先生はもともと
間違って書いたのでは
ないかと言われています。